

ネットワーク時代の今を追う
<http://www.wakabayashi.com/internetroad21/>

by the people for the people

万人が作り万人が利用する

フリー百科事典ウィキペディアの挑戦

人類のあらゆる知識を ひとりのために

ウィキペディアは、100以上の言語で460万件以上の記事について67,000人の寄稿者が活動しているネット上のフリー百科事典である(2007年2月5日現在)。歴史上に例を見ない文字通り地球規模の壮大な知への挑戦が進行中である。利用は無料(フリー)、記事の執筆や編集への参加も自由(フリー)である。「フリー百科事典」と呼ばれるゆえんである。

ウィキペディアの運営の中心に位置するのがウィキメディア財団(本部は米国

フロリダ州タンパ、フロランス・ニバル=ドゥヴァール理事長)である。このフリー百科事典は、2001年、ジミー・ウェルズとラリー・サンガーの二人が創設した。

ウィキペディアの創設者であるウェルズは現在名誉会長である。ウェルズの生い立ちが興味深い。彼は1966年アラバマ州ハンツヴィルに生まれ、祖母の経営する「一部屋の校舎」の私立学校で学ぶ。違う学年の子ども達と4人で学ぶ学校生活が8年生まで続くのである。まさに米国は広し、である。彼の祖母は片田舎の篤志家だったのだ。ウィキペディアのコピーにも使われているウェルズの有名な言葉「こんな世界を想像してごらん。そこではこの地上に生きる誰もが例外なく人類のあらゆる知識をフリーで利用できるんだ。これがまさにぼくらが今やっていることなんだよ」の根っ

こにはハンツヴィルの「一部屋の校舎」があったのかもしれない。

百科事典としての実力の程はどうか。2005年の英国の雑誌「ネイチャー」の調査では、「ブリタ

ニカ」との比較で既に拮抗していると評価している。誰もが参加できるということでも最も心配されるのは記事への破壊行為である。破壊行為については2004年のIBMの複数の研究者の報告によれば、顕著な回復力を持つと結論している。

国際語としての日本語

ウィキペディアは、どんなに少数派の言語もこれを国際語として位置づけた画期的な文化運動と言えよう。それぞれの言語は世界をめざして独自に編集されている。よってどこかに権威ある事典があって、その地方版がそれぞれの言語で編集されているのではない。

ウィキペディア日本語版管理者の吉沢英明氏によれば、ウィキペディア日本語版はウィキペディア「日本」版なのではない。あくまでも「日本語」版なのである。日本語版は全人類の知識をたまたま日本語を使用して表現しているにすぎない。よって記事の執筆・編集への参加は世界中の人びとからアクセスされる前提で取り組んでほしいと言っている。(吉沢英明著『ウィキペディア完全活用ガイド』)

ウィキペディアの日本語版の記事数は32万件を超えており、目下のところ第5位である(2007年2月現在)。第1位から4位までは、英語(161万件以上)、ドイツ語(53万件以上)、フランス語(43万件以上)、ポーランド語(34万件以上)の順である。第6位以下10位までは、オランダ語、イタリア語、ポルトガル語、



フリー百科事典ウィキペディアのホームページ
<http://www.wikipedia.org/> より



創設者のジミー・ウェールズ
<http://en.wikipedia.org/wiki/Jimmy_Wales> より

- フリー百科事典ウィキペディア日本語版
<<http://ja.wikipedia.org/wiki/> メインページ >
- ウィキペディア国際版
<<http://www.wikipedia.org/>>
- ウィキペディアを運営するウィキメディア財団
<<http://wikimediafoundation.org/>>
- 吉沢英明著『Wikipedia ウィキペディア 完全活用ガイド』
(マックス、2006年)
- 安野光雅・大岡信・谷川俊太郎・松居直 編『にほんご』
(福音館書店、1979年)

スウェーデン語、スペイン語と続いている。取組み中の言語も含めれば既に250言語に達している。

日本では国語という呼び方に知らず知らずのうちに慣らされてしまっている。日本語は日本国の公用語として「国語」の時間に教えられているのである。谷川俊太郎氏は前々から国語としてではなく日本語の授業が行われるべきだと主張している。そのほうがはるかにおもしろい「日本語」の授業ができるとして「にほんご」の教科書を実際に作っている。言葉を楽しむことを基本とした楽しい教科書だ。

ウィキペディアの考え方は国際語としての日本語にあらためて光を与えてくれるものである。200万人以上の人たちが世界中で日本語を学んでいる事実がある。一方では、日本語版管理者の吉沢氏によれば、アイヌ語や琉球語のウィキペディアの企画も進んでいるという。これもあたりまえの事なのだが、日本国内も実は多言語環境だったわけである。

それぞれの言語版の間では関連記事、また関連する用語間にリンクが張られている。たとえば日本語版で「夏目漱石」を検索してみると、既に14の言語に漱石の記事が存在している。漱石の写真も各言語で異なるものが採用されておりそれぞれに個性的である。例えばフランス語版で漱石を見るとかな漢字も混在している。ウィキペディアの世界では、異なる言語の間で参照しあっているうちに多

言語がナマの形で入り交じってくるのはむしろ自然なことなのだ。

コピーレフトという考え方

ウィキペディアにおいては、フリー百科事典編集の共同作業を可能とするために、他人の作品の写し(=コピー)や修正した作品を配布することを認めるコピーレフトという考え方を採用している。コピーライトの制限からの解放である。

コピーレフト(copyleft)は著作権・版權を意味するコピーライト(copyright)に対するシャレから出た言葉である。ウィキペディアの中国語(漢語)版を見ると、コピーレフトの訳語として「反版權」、「版權左派」、「公共版權」などを紹介している。こちらもちろんシャレであろう。

コピーレフトも次のような意味でコピーライト同様にライセンス(使用権)である。つまり、他者の作品の写しや修正を行うことが認められるのは、こうした行為を行う者自身が自分の著作物に対する同様のコピーレフトの権利を公衆に対して認める義務を負う場合である。こうしてコピーレフトの網は公衆の財産として限りなく拡大してゆく。よって「公共版權」という中国語訳はかなり適訳と言えよう。

コピーレフトという考えはフリーソフトウエアの伝道師として知られるリチャード・ストールマンに由来する。ウィキペディアではすべてのページにストールマンが設立したフリーソフトウエア財団が配布する



ウィキペディア完全活用ガイド
<<http://www.amazon.co.jp/>> より

GNU Free Documentation License という「コピーレフト」なライセンスを表示している。

ウィキペディアは読者である利用者が編集者でもあるという構造が不断に再生産されてこそ実現する事業である。日本語版の管理者である吉沢氏によれば、英語版などの他の言語と比較して、アカデミックな記事への協力者が少ないという。もうひとつ欠かせないのがウィキメディア財団が運用しているサーバーなどの維持のための費用の確保である。これらの費用はすべて個人の寄付でまかなわれているのだ。

今回はウィキペディアを取り巻くさまざまな話題を取り上げてみたい。

(わかばやし・いっぺい)